

「恐れることはない」 -マタイによる福音書講解説教 111-

マタイによる福音書 28章1節～15節

説教 岡村 恒牧師

「恐れることはない。あの方は、ここにはおられない。」と、主イエス・キリストがご復活なさったことを告げたのは人間ではありませんでした。聖書は全世界の歴史がここで止まり、全く新しい時代が始まったと告げます。ふたりの婦人たちが見て伝えたことは、主イエスの墓が空であったということです。

あの日、主イエス・キリストの墓は空になり、復活されたのです。ここに信仰の土台があります。ここで、私たちの命が新しくなったのです。キリスト教会の信仰は〈空の墓〉を信じる信仰なのです。主イエスは、確かに十字架に磔にされ、血を流して死んで行かれました。この姿を見ていたのは足もとにいた婦人たちでした。布に巻かれ、埋葬される最期まで見届けたのです。ひとつひとつを記憶しながら。

やがて、安息日が終わってマグダラのマリアと、もうひとりのマリアが墓へとやって来ました。香油を用意して埋葬を完了させるためだと記す福音書もありますが、マタイによる福音書はそう記していません。墓を見るために、死者を確認するためだと、記します。事実を確認するのです。その時、地震が起こります。日常生活では無いことが起こるのです。神の力がこの墓で発揮されたのです。番兵たちは震え上がりました。死人のようになったのです。マリアたちも言葉が出なかったでしょう。

主の天使は第一声「恐れることはない。」(5節)と言いました。マリアたちは、墓に死人を見に行ったのです。現実の延長線上にある墓を見に行ったのです。主イエスのご遺体はそこにある筈だったからです。しかし、そこで見たものは死体ではありません。天使の言葉を聞いたのです。事実を肯定して言葉が発せられたのです。天使たちは主の十字架での死と、葬られた事実を確認します。しかし、ここで新しい事実が告げられました。「あの方は、ここにはおられない。」(6節)。復活なさったと言うのです。

私たちもいつも期待外れのできごとに振り回されます。新しい事実と直面して、怒りを覚え不安を覚えることがしばしばです。婦人たちは主イエスの復活ということを知っても信じられなかったでしょう。

「恐れることはない。」(5節)という言葉を知ると思い出す歌があります。私が留学していた

ドイツで父が台湾に宣教に行くと言われた時のことです。帰国後のことを思い描いていたのに全てが覆されました。その時に聴いたドイツ語の讃美歌が「恐れることはない(Hab keine Angst)」という曲でした。その曲は歌います。

「神の愛が、死に勝利したのだから」、「いつでも私があなたと共にいる」、「私がここにいる。だから恐れることはない」、「心配しないで。恐れることはない」と。十字架にかかってくださり、私たちの罪を贖ってくださった方が、いつでもどこでも、「私はここにいる」と語りかけてくださっている。私たちの信仰は、これを信じる信仰です。神が主イエスを墓から引きあげてくださった、という事実を、私たちは日曜日が来る度に一緒に確認して歩んでいるのです。

天使はガリラヤに行きなさいと言いました。それは、主イエスと共に歩いて来たガリラヤです。あなたのガリラヤ。生活の真ただ中に行き歩めと言うのです。私たちはどれだけ神のことを思い、御心にかなうことを成して来たのだろうと振り返ると、深い絶望に陥ってしまいます。しかし、だからこそ、主イエスは私たちの罪を背負って十字架にかかってくくださったのです。そして、私たちは日常の中で、復活なさった主イエスに出会うのです。主イエスの空の墓を目にした婦人たち。そこには光がありました。その光によって、魂の闇を照らしていただいて歩む群れがここにあるのです。死人のような姿の私たちのために聖書のみことばは響くのです。「復活されたお方は生きておられるのだ」と。イエスは語られます。「おはよう」と。キリストは神秘的ではありませんでした。ごく普通の生活の中に、私たちの傍らに、来てくださるのです。この「おはよう」を聞いた婦人たちは、全てを受け入れます。信仰はこのように上から与えられるのです。

神の救いのご計画は、ひとり子を十字架にかけて死人にする、というものでした。この御子の霊は、信じる者に注がれて、共にいて下さいます。この信仰の中心に空の墓があります。ここに、私たちは自分自身の救いの確かさを見るのです。確かに、私たちに永遠の命が与えられていることを、繰り返し確認するのです。私たちもまた、「墓は空だ!」と言ってはばかりません。「恐れることはない」。天使は語りかけます。主は生きておられるのです!

(記 説教要約奉仕者)